日本語母語話者による スペイン語 si 条件文の使用と文脈依存性

有田節子

一　はじめに

日本語における条件表現研究では、基本条件形式が複数あることから、その使い分けの実態を調査し記述する研究が多く見られる。日本語教育においても、条件表現の複雑な使い分けの実態を踏まえ、どのように教えていくか、提出順序や教授方法に関心が置かれる（蓮沼・有田・前田二〇〇一、庵二〇一七、前田二〇二〇など）。

このように複数の表現形式を巧みに使い分けている日本語母語話者は、基本条件表現が一つであるような言語を学習する過程で、条件表現をどのように使用しているのだろうか。そのような問題意識の下、本稿では、基本条件表現形式が si 一形式であるスペイン語の学習者コーパスを用いて、日本語母語話者の使用実態を調査し、日本語母語話者の si の使用傾向を明らかにし、その背後にある要因について考察する。

本稿の構成は以下のとおりである。次節で日本語とスペイン語の条件表現を概観し、それぞれの言語の基本条件形式に共通する用法とそうでない用法を確認する。三節ではスペイン語学習者コーパスの第一言語（L1）が日本語である学習者のデータを対象に si 条件形式の使用実態を調査した結果を述べる。四節で調査結果を考察するが、その際、スペイン語母語話者がブログ上で用いた si 条件形式の使用実態の調査結果を比較対象とする。五節でまとめる。

二　日本語とスペイン語の条件表現概観

二・一　日本語の基本条件形式と主な用法

日本語（現代標準語）は条件を表す基本的な形式が複数ある。動詞「書く（kak-u）」を例にすると、「書けば（kak-eba）」（＝バ）、「書いたら（kai-tara）」（＝タラ）、「書くと（kak-u-to）」（＝ト）、そして「書くなら（kak-u＝nara）／書いたなら（kai-ta＝

nara）」（＝ナラ）の四形式である。このうちナラのみが時制の対立（-u 形と-ta 形）のある節をとる。

これら四形式に共通するのは、ある事態が現在または未来に実現したと仮定してその結果どのようなことが起こるかを予測して述べるような用法である。これを予測的条件用法（Ⅰ）と呼ぶことにする。後述の（一）のような文が典型例である。主節に対話相手への行動要請（命令や依頼）が表される場合、（二）のようにトが使われず、バが使われにくくなる。これを予測的条件用法（Ⅱ）と呼んでおく。現在や過去の事実に反することを起こったと仮定する（三）のような文を反事実的条件用法と呼ぶ。これにはトのみが使われない。条件節事態が成立した場合に主節の事態が法則的または習慣的に成立するような関係を表す（四）のような文を総称的条件用法と呼ぶ。トやバが使われる。そして、実現するかどうかが発話の時点で定まっている事態（通常は現在または過去の事態で、まれに未来の事態でも実現また未実現が見込まれる事態）についてそれが成立した場合を仮定して判断や心的態度を述べるような文を認識的条件用法と呼ぶ。（五）（六）のように、主にナラが使われる。仮定条件を表すわけではないが、条件節も主節も事実であることがわかっていることを条件形式であらわすことがある。これを事実的条件用法と呼ぶ。（七）のようにト、タラが使われる（前田二〇〇九、有田二〇一七などの分類参照）。

（一）明日雨が［降ると／降れば／降ったら／降ったなら］試合は中止される（だろう・かもしれない）。

（二）明日雨が［*降ると／?降れば／降ったら／降ったなら］試合は中止してください。

（三）昨日雨が［*降っていないと／降っていなければ／降っていなかったら／降っていなかったなら］試合がおこなわれただろうに。

（四）雨が［降ると／降れば］試合は中止になる。

（五）昨日雨が降った（の）なら試合は中止されたに違いない。

（六）天気予報がいうように明日台風が上陸する（の）なら、今日のうちに出発したほうがいいのではないか。

（七）教室に［入ると／入ったら］数人の学生が黒板の前に立っていた。

その他に、条件節が主節の発言の前置きとしての機能を持つ表現（「考えてみると、なぜこんなことになったか自分でもわからない」）や、文法的には接続詞と同等とみなされる表現（「そうすると」など）、モダリティ助動詞として文法化したとみなされる表現（「今日は早く帰らなければならない」）など周辺的な用法がある。

二・二　スペイン語の si. 条件形式の主な用法

二・二・一　スペイン語の文構造の概観

スペイン語の条件表現の検討に入る前に、スペイン語の文の構造的特徴について、本稿の議論に直接関係することに絞って簡単に見ておく。

スペイン語の特徴の一つは、福嶌（二〇一九）にもあるように、動詞屈折体系が豊かな点である。動詞には直説法、接続法、命令法の三つの叙法があり、直説法と接続法では、主語の人称・数によって一つの時制に六つの形（一人称単数・複数、二人称単数・複数、三人称単数・複数）がある。

主語はしばしば省略され、また、主語が現れる場合、主語＋動詞の順番が基本だが、主語が聞き手にとって新しい情報の場合、主語が動詞の後ろに現れることがあり「主語の位置は『はなしの伝え方』によって変化する」（上田編（二〇一一）三六〇頁）。

（八）　Soy estudiante.（私は学生です―主語の「私」が省略されている）

（九）　a.　**El banco** está al final de esta calle.（銀行はこの通りの突き当たりにあります）

b.　Murió olvidado y pobre **el que un tiempo fue famosísimo poeta.**（かつては非常に有名な詩人だった彼は忘れ去られ困窮の中で亡くなりました。）（以上、上田編（二〇一一）三五七頁）

副詞節は、節頭に副詞節を導く接続形式が現れる。副詞節は主節に先行する場合も後続する場合もある。（十）（十一）に **cuando** によって導かれる時間節が主節の前に現れる場合と後に現れる場合を示す。

（十）　El mes pasado, **cuando** cumplió sesenta años, le prepararon una sorpresa.（先月、彼が六〇歳になったとき、彼らは彼にサプライズを用意した。）

（十一）Ven a buscarme **cuando** sean las diez.（十時になったら迎えにきてください。）

（以上 Diccionario de la lengua española, Real Academia Española）

条件節の場合も、時間節同様、主節に先行することも後続することもある。

二・二・二　スペイン語 si. 条件表現の分類

スペイン語 si. 条件表現の分類については、Montolío（1999）の以下の分類を参照する。標準的用法と個別の用法に分けられ、標準的用法には、現実的条件文、可能性を表す条件文、非現実的条件文がある。これらは基本的には si. 節の時制と法によって分類されている。表1に用法分類と対応する用例、日本語訳を示す。

表 1　スペイン語 si 条件表現の用法分類

	スペイン語例	日本語訳文
ア　現実的条件文	Si nieva el próximo fin de semana, iremos a esquiar.	来週末雪がふれば、スキーにいきます。
イ　可能性条件文	Si nevara el próximo fin de semana, iríamos a esquiar.	来週末雪が降るようなことがあれば、スキーにいくのだが。
ウ　非現実的条件文	Si hubiera nevado el pasado fin de semana, habríamos ido a esquiar	先週雪が降っていれば、スキーに行ったところだ。
エ　皮肉などの暗示	Si eso es música, yo soy Beethoven	それが音楽なら、私はベートーベンだ。
オ　説明的用法	Si te ha dicho eso, será por alguna razón	彼がそう言ったならそれは別の理由からだろう。
カ　丁寧さ	Si no le molesta, ese edificio es la Sagrada Familia.	さしつかえなければ、その建物はサグラダファミリアです。
キ　メタ言語的用法	Este verano nos vamos a México, si es así como lo pronuncian allí	今年の夏はメキシコに行きます。メキシコの発音がそうであるなら。
ク　発話行為の状況	Si tienes sed, hay cerveza en la nevera	喉がかわいているなら、冷蔵庫にビールがありますよ。
ケ　譲歩的条件文	¿Cogerás el coche si llueve de esta manera?	こんなに雨がふっていても車を運転するんですか？

（ア）現実的条件文は、si節の動詞が直説法をとり、発話時においてsi節の事態が実現している、あるいは実現できると考えられているものである。si節の時制、主節動詞の時制・法選択、そして文脈により、広範に解釈される。（イ）可能性を表す条件文は、si節の動詞が接続法過去をとるものが規範的とされ、現実的条件文の場合とは違って、si節には未来における実現にためらいがある事態や現実とは明らかに異なる事態が想像的に述べられるものである。si節には直説法線過去や直説法過去未来が使用されることもある。（ウ）非現実的条件文は、si節が現在または過去において偽であるような事態を表すもので、現在の事態の場合は接続法過去、過去の事態の場合は接続法過去完了が用いられる。ただし、口語表現ではsi節に直説法現在や直説法過去完了が現れることもあるとされている。

これら標準的用法の他に、個別的用法として、直説法で非現実であることを表し皮肉を暗示する用法（エ）、主節にsi節の発話の理由や弁明を表す説明的用法（オ）、丁寧さのために表される用法（カ）、メタ言語的な用法（キ）、そして、si節が主節の発話行為が意味のあるものとなる状況を表す用法（ク）（この用法は「疑似条件文」と呼ばれることもある）がある。なお、Montolío（1999）では、主節に命令や疑問が現れる場合を特に「帰結節が非主張である用法」として個別的用法としてとりあげる一方で、標準的用法の一つである現実的条件文の一用法としてもとりあげている。ここでは、主節に命令や疑問が現れる場合も現実的条件文に含めることにする。さらに、これらの用法とは別に、si には譲歩的用法（ケ）があることも指摘されている。

スペイン語のsi条件形式の用法のうち、標準的な三用法は、日本語の基本条件形式によっても表される。また、個別的用法とされるエ～クの用法についても、日本語の基本条件形式のいずれかの形式で表される。ケの譲歩的用法は、日本語の条件形式には対応するものがなく、譲歩を表す別の形式（-temo, = noni など）によって表される。

一方、日本語の基本条件形式の用法のうち事実的条件用法は、

スペイン語の si. に対応する用法はない。また、予測的条件用法（Ⅱ）については、si. の現実条件用法に対応するが、スペイン語では時間節の cuando によっても表されることがある。この場合 cuando 節は接続法現在形をとる。

（十二）駅に着いたら電話してくれ。

Llámame **cuando** llegues a la estación.

cuando に後続する llegues は llegar（到着する）の接続法現在形（二人称単数）である。

三　調査資料・調査対象

三・一　調査資料（スペイン語学習者コーパス）

日本語母語話者の si. 条件形式の使用実態を調査するにあたって、本稿が資料としたのは、Corpus de aprendices de español（スペイン語学習者コーパス）（以後 CAES）である。このコーパスはスペイン語を外国語として学ぶさまざまなレベル（「ヨーロッパ共通参照枠に基づくＡ１レベルからＣ１レベル」）の学習者によって書かれた文章を集めたもので、この基準は Instituto Cervantes（「スペイン語の振興と教育またスペインとスペイン語圏文化普及を目的に設立されたスペイン政府の公的機関」（インスティトゥト・セルバンテス東京公式ウェブサイトより））のカリキュラムにも適用されている。学習者の第一言語は日本語の他にドイツ語、アラビア語、中国語、フランス語、ギリシャ語、英語、イタリア語、ポーランド語、ポルトガル語、そしてロシア語がある。このコーパスプロジェクトは二〇一一年から始まっており、今回使用するのは二〇二二年三月にリリースされた最新版（二・一版）で、この版から第一言語を日本語とする学習者のデータが新たに追加されている。

公式ウェブサイト（https://galvan.usc.es/caes/）によればコーパスの総語数は一〇四五〇九七語で、諸外国にある Instituto Cervantes のセンターと大学を介して二〇一一年十月から二〇二〇年十月にかけて収集されたものである。

本稿が調査した資料は、第一言語を日本語とする学習者による一二三一一七語（記号なども含む）のテキストで、レベル別の内訳は、表2、表3のとおりである。（CAES の公式ウェブサイトより）

三・二　調査対象

調査対象としたのは si. が単独で条件を表す副詞節を構成する複文である。si. は英語の if と同様、疑問を表す名詞節（間接疑問節）を構成することがあるが、この用法は対象としない。他に、como si（比況）、incluso si（譲歩）など、他の形式と結びついて特定の意味を表すような場合も対象から外した。

検索条件は次のとおりである。L１（第一言語）を japonés（日本語）にし、アクセント記号を区別するように設定した上で、

Elem. Gramaticales（文法形式）を si、Etiqueta（品詞）を conjunción（接続詞）に指定した。この条件で検索した結果、三九五例が抽出された。ここから、手作業で、間接疑問節の si が誤って入ってないかチェックし、かつ、比況の como si などを排除し、三五二例が最終的に残った。

三・三　調査結果

三・三・一　用法別

調査対象の三五二例について、二・二・二節にあげた分類に基づきタグ付与をした結果、標準的用法であるア現実条件用法、イ可能性条件用法、ウ非現実条件用法の用例数は、それぞれ、二八八例、五六例、二例で、現実条件用法が多数を占めた。一方、個別的用法として見られたのは丁寧さを表す用法のみで、六例だった。それぞれをレベル別に示したのが表4である。

現実条件用法の使用頻度が極めて高く、全レベルにわたって使用されていることがわかる。現実条件用法は si 節の述語が直説法であるのに対し、可能性を表す条件用法や非現実条件用法では si 節に接続法を使わなければならないので、使用が避けられていることが要因として容易に想像される。個別用法で唯一見られた丁寧さのための用法も si 節は直説法である。

表 2　レベル別言語単位数

レベル	総計	A1	A2	B1	B2	C1
総計	123117	26235	41044	32367	16254	7217
異なり語数	12088	3487	5211	4744	2788	1850
区切り記号なし	104314	21374	34660	27608	14194	6478
区切り記号、数字、日付、記号なし	104036	21366	34514	27504	14180	6472
区切り記号、数字、日付、記号、固有名詞なし	99393	20044	32638	26564	13880	6267

表 3　レベル別見出し語数

レベル	総計	A1	A2	B1	B2	C1
総計	5313	1819	2545	2262	1452	1114
区切り記号なし	5289	1804	2525	2247	1436	1102
区切り記号、数字、日付、記号なし	5109	1897	2440	2162	1422	1096
区切り記号、数字、日付、記号、固有名詞なし	3446	1171	1688	1751	1306	1014

表 4　用法分類とレベル別用例数

	A1	A2	B1	B2	C1	計
ア　現実	6	87	123	66	6	288
イ　可能	0	4	34	14	4	56
ウ　非現実		1	1			2
カ　丁寧さ		1	5			6
計	6	93	163	80	10	352

三・三・二　現実条件用法：時制、主節の文類型

現実条件用法を詳しくみることにする。現実条件用法の si. 節には、直説法現在、直説法線過去、直説法現在完了そして直説法大過去が現れる可能性がある。しかし、今回の調査では現実条件用法二八八例のうち、現在時制二七八例（九六・五％）、現在完了時制二例（〇・七％）、線過去時制四例（一・四％）、点過去時制三例（一・〇％）で、現在時制が多数を占めることがわかった。

現実条件用法の主節の文類型について、平叙文、命令文、疑問文に分けて調査したところ、命令文が四十四例、疑問文が二十九例で、現実条件用法二八八例の実に四分の一を占めている。二・二・二節でも触れたように、Montolío（1999）は主節が命令文や疑問文であるような例については、標準的用法とは別に扱っていることから、これらの例は標準的用法の中ではやや周辺に位置付けられているといえる。その用法が日本語母語話者の si. 条件文の使用においては決して周辺的ではないという点は注目に値する。

三・三・三　si. 節に現れる動詞

si. 条件節にどのような動詞が現れるかについても調査した。スペイン語は、日本語と同様、主語名詞句がしばしば省略されるため、si. 節の冒頭に動詞が出現することができ、si. 条件文全体の例のうち、二五二例がこれに相当する。先の条件形式 si. の検索条件に加え、品詞を verbo（動詞）に指定することにより、si. の次に動詞が現れる例をとりだすことができる。si. 節の冒頭には動詞以外にも副詞、限定詞、前置詞、代名詞、名詞、形容詞が現れる場合があり、それらの例に現れる動詞は手作業で抜き出した。動詞の異なり語数は六九語、延べ語数は三八三語である。このうち、出現頻度十以上の動詞は表5にあげる八語で、全体の七四・二％を占める。

fumar（たばこをすう）を除く動詞は動作ではなく状態を表す動詞である。日本語母語話者は si. 節に状態を表す動詞を使用する傾向があることがわかる。

四　考察

四・一　スペイン語母語話者との比較

本節では三節の調査結果について考察する。

まず、現実条件用法に使用が大きく偏っている点について考察する。この偏りをどう見るか、本稿では、試みとして、スペイン語母語話者の si. 節の使用実態と比較する。国立国語研究所が開発した I-JAS（「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」）のように、同様の基準で収集された母語話者のデータがあれば比較が容易だが、CAES には母語話者のデータがない。そこで、スペイン語の大規模コーパス Corpus del Español del Siglo XXI（CORPES XXI）で提供されているブログのサブコーパスから収集した si. 条件文のデータを手がかりとする。

具体的な分析に入る前に、比較調査対象とするCORPES XXIについて簡単に述べておく。このコーパスはスペイン王立アカデミー（Real Academia Española（RAE））によって整備されたレファレンスコーパスで、RAEの公式ウェブサイトによると、スペイン、アメリカ、フィリピン、赤道ギニアの文書と口語文で構成されている。現在のバージョンは、二〇二一年七月にリリースされた〇・九四版で、三億二七〇〇万件以上の文献が収録されており、文章や口語訳の正書法は約三億五〇〇〇万通りとなっている。書籍、雑誌に加え、ウェブ上のブログなどの雑文もサブコーパスとして収録されている。

今回の調査では、CAESの学習者によるテキストが日常生活に関係する内容に偏っていたため、それに合わせて、スペインで二〇一六年から二〇二〇年までの間にウェブ上のブログに掲載された日常生活に関するテーマの文章からデータを収集することにした。

スペイン語のsiの使用実態の概要を把握するために、まず、si節に現れる動詞の法と時制を手がかりに調査した。検索条件は、Lema（見出し語）をsi、Clase de palabra（品詞）をconjunción（接続詞）、従属的であること、そしてサブコーパスを指定した上で、como siやpor siなどの慣用的表現を排除し、検索した結果三七一例を得た。このうち、述語が動詞の例は三四八例である。

si節の動詞が直説法のものは三二二例、接続法過去のものは十八例、そして接続法過去完了のものは三例だった。これらが必ずしも現実条件用法、可能性条件用法、非現実条件用法の数字とは限らないが、少なくとも、si節動詞が直説法である例が大半であること（三七一例中三二二例で八六・八％）から、スペイン語母語話者のsiの使用についても、現実条件用法に偏っており、現実条件用法への偏り自体は、日本語母語話者に限った特徴ではないということが言える。

次に、日本語母語話者の現実条件用法のsi節において、直説法現在形の使用への偏りがある点について検討する。スペイン語母語話者の現実条件用法における動詞の時制の使用割合は次のとおりである。si節の動詞が直説法現在の場合は二七〇例（三二二例の八三・九％）、直説法線過去形の場合は十七例（三二二例の五・三％）、直説法点過去形の場合は五例（三二二例の一・六％）そして、直説法現在完了の場合は十八例（三二二例の五・六％）である。

直説法現在形に偏ることは日本語母語話者の場合と変わらない。したがって、日本語母語話者のsi節の動詞に直説法現在形が多いこと自体は日本語母語話者に特有とは言えない。しかし、直説法現在完了時制の割合における違いは無視できない。この点について、詳しく検討する。

まず、日本語母語話者の直説法現在完了時制の用例は以下の二例のみである。学習者の書いた文章なので、誤用を含むが、そのまま提示する。

(十三) Si **ha pedido** complentamente y jamás recuperar lo, reclamo que me compense todo el precio de mi equipaje.
(もしあなたが完全にそしてもはやそれ（荷物）を取り戻すことができなかったなら、わたしの荷物のすべての代価を補償するよう請求する。)

(十四) Si **han recibido** este correo, llamen me a 090-1111-1111.
(もしこの郵便物を受け取っていたら、090-1111-1111 に電話してください。)

太字で示した部分が現在完了時制（助動詞 haber＋過去分詞）である。それぞれ「～した場合は・・・します」「～した場合は・・・してください」のような意味で、si 節が「完了した場合に次にする行動」について述べたものである。

一方、スペイン語母語話者の現在完了の用例は、上記のような完了した場合に次にする行動について述べたものも見られるのだが、それとは別に、特徴的な例が見られる。表1のオ説明的用法に分類すべき例である。

まず、日本語母語話者の用例と同じタイプの例をあげる。

(十五) Por eso, si aún no te **has suscrito** a este blog, ¡apúntate ya! y consigue las ventajas para suscriptores de “Hablando en corto”
(だから、まだこのブログを読んでいないなら、さあ、登録して。そして、「近くで話す」のサブスクリプションの特典を手に入れて。)

これに類する例は十八例中十一例である。

次に、日本語母語話者の用例にはない、説明的な用法の例をあげる。

(十六) Me he centrado en cinco especias con mucho respaldo científico y de fácil acceso, pero podríamos hacer un análisis similar para casi todas las especias o hierbas comunes. Si las hemos usado durante milenios es por algo.
(ここでは、科学的な裏付けが多く、入手しやすい５つのスパイスに焦点を当てましたが、ほとんどすべての一般的なスパイスやハーブについて同様の分析が可能です。何千年も使ってきたのには、理由があるのです。)

(十七) Hoy he seleccionado lo mejor del Festival de Cine de Cannes a mis ojos. No sé si también a los vuestros. Francamente, en Francia y San Sebastián se encuentran las mejores alfombras rojas. Si he titulado así el post de hoy, ‘Una feria de ganado llamada Cannes’, es porque me hace gracia la de gente que se pasa por ahí sin nada intelectual que aportar.
(今日は、私の目から見たカンヌ映画祭のベストを選びました。みなさんにとってどうかはわかりませんが。正直なところ、最高のレッドカーペットはフランスとサン・セバ

スチャンにあります。今日の投稿のタイトルを「カンヌという名の家畜の品評会」としたのは、知的貢献を一切せずにそこを通る人が滑稽だからです。）

このような説明的用法が七例見られた。

説明的用法は Montolío（1999）で個別的用法とされたものである。個別的用法には丁寧さを表す用法も含まれ、表4に示すように、日本語母語話者の使用例に見られる。さらに、三・三・二節でも述べたように、主節に命令文や疑問文が現れる、Montolío（1999）で標準的用法とは別扱いされたものも七十三例見られることはすでに指摘したとおりである。そうすると、標準的用法でないからといって日本語母語話者が習得しにくいとは言えない。この点については、次の四・二節で議論する。

この小節の最後で、日本語母語話者の si 節に現れる動詞が状態動詞に偏る点について考察する。スペイン語母語話者の si 節に現れる動詞を出現頻度順にあげると、tener（持つ、三十七例）、ser（である、三十六例）、querer（ほしい、二十九例）、poder（できる、十七例）、estar（である、十六例）、ir（いく、十二例）と、二桁の出現数の動詞は ir を除いて状態性であり、出現頻度上位の動詞が状態性に偏る点はスペイン語話者の場合も同様である。

しかしながら、カバー率には違いがある。スペイン語母語話者のデータで、出現頻度が二桁の動詞のカバー率は五三・三％に過ぎず、日本語母語話者の場合にくらべ、高頻度動詞のカバー率は高くない。さらに出現頻度が五の動詞に tomar（とる）、hacer（する）、四の動詞に venir（くる）、三の動詞に utilizar（つかう）、seguir（つづける）がふくまれるなど、非状態性の動詞の出現割合は決して低くない。当然のことながら、異なり語数も八十四例と日本語母語話者よりも多様な動詞が現れており、日本語母語話者のように特定の状態性の動詞に極端に偏るわけではない。

日本語母語話者のデータでさらに注目すべきは、主節が命令文や疑問文の場合、その大半（七十三例のうち六十八例）の動詞が状態性であるという点である。なお、スペイン語母語話者のデータでは、主節が命令文である si 条件文は十六例、疑問文の例は八例に留まっている。日本語母語話者の

表 5　出現度数が 10 以上の動詞

	poder	tener	ser	haber	encontrar (se)	querer	estar	fumar	カバー率(%)
日本語母語話者	76	53	51	47	18	15	14	10	**74.2%**

	tener	ser	querer	poder	estar	ir	カバー率(%)
スペイン語母語話者	37	36	29	17	16	12	**53.3%**

データにおいて主節が命令文や疑問文の例が一定数を占めることと、si節の述語が特定の状態性の述語に偏ることは相互に関連しており、スペイン語母語話者にはない特徴だと言ってよいだろう。

四・二　説明的用法と文脈依存性

本小節では、同じように標準的用法から外れるにもかかわらず、日本語母語話者の使用に丁寧さを表す用法が見られ、この用法を習得できていると考えられるのに対し、説明的用法が見られず、習得していない可能性がある点についてその要因をさぐる。

説明的用法の条件節は主節を導くための「論拠」になっている。Montolío（1999）では、説明的用法は統語的には「分裂文」だと述べており、主題―題述構文と類似の構造と捉えられる。si.のような条件形式にこのような用法があることは、従来から条件文研究でしばしば指摘されているように、条件節と主題が近い関係にあることの根拠の一つにもなる。

このような説明的用法は、si.だけに限らず、日本語の基本条件形式にもある。ナラ節によって表され、主節で、「それは」のような形式でナラ節の内容を受け、文末の「ということだ」や「のだ」によって論拠を述べていることが明示化される。

（十八）もし、（いつも来ない）太郎が来たのなら、（それは）何か訳がある（ということだ）。

「太郎が来た」ことと「何か訳がある」こと自体の間には因果関係はなく、「太郎が来た」ことに対し、「何か訳がある」と判断するのは、話し手で、その判断は文脈に依存する。

このような例と、日本語母語話者の使用例にあった（十三）（十四）を比較してみよう。（十三）の場合、「荷物を紛失して探し出すことができなかった」という事態の成立が「請求する」という行動の直接の根拠として表されており、（十四）では「郵便物が届く」という事態の成立が「電話する」という行動に直接結びついており、特別な文脈を必要とするわけではない。丁寧さを表す次のような使用例についても、主節の依頼をやわらげる働きをしているにすぎず、条件節と主節を特別に結びつける文脈が必要とされない。

（十九）¿Pódrias prestar me lo si no te molestaría?
（さしつかえなければそれを私にかしてくれませんか？）

以上のことから、日本語母語話者による説明的用法のsi.の習得を妨げているのは、説明的用法が文脈依存性が高いという点にあると考えることができる。興味深いのは説明的用法は日本語では時制の対立を持つナラ形式やトスレバ形式によって表すことはできるが、時制の対立のない他の三形式では表しにくいという点である。日本語の条件表現の記述的研究でしばしば指摘されるの

は、基本四形式のなかで、タラ形式の使用頻度が高く、ナラ形式が低いという点である。日本語母語話者が si. 条件形式を使う際に、タラ形式の用法を si. で表現しようとしている可能性もある。さらに、（十六）（十七）の日本語訳のように、主題形式の「（～の）は」で表現するほうが適切な場合もある。「は」という主題を表す専用形式があるということも、説明的用法の si. の習得の障壁になっていると考えることもできる。

五　おわりに

本稿は、複数の条件形式がある日本語を母語とする話者が、基本条件形式が si. のみであるスペイン語の条件表現をどのように使用しているかその実態を明らかにするために、スペイン語学習者コーパスの日本語母語話者の使用例を調査した。その結果、日本語母語話者の学習者の si. の使用は現実条件用法に大きく偏り、また、si. 節の動詞の時制は直説法現在の割合が極めて高いことがわかった。一方、同様の傾向はスペイン語母語話者にも見られることがスペイン語大規模コーパスのブログサブコーパスにおける調査で確認されたが、同時に、si. 節の直説法現在完了時制の使用頻度において違いがあることも明らかになった。それぞれのコーパスで得られた現在完了時制の例を比較すると、日本語母語話者のデータには見られない説明的用法がスペイン語母語話者の使用には見られた。この用法は、条件節事態と主節事態の間に何らかの因果関係があるような例とは違って、それが発される文脈に高度に依存する。日本語母語話者の使用例は、条件節事態が成立した場合に次にする行動を述べるものが多く、文脈への依存性はそれほど高くないことから考えると、文脈依存性の高さが日本語母語話者の si. 条件形式による表現を妨げている可能性があることを示唆した。

引用文献

有田節子（二〇一七）「日本語の条件文分類と認識的条件文の位置づけ」
有田節子編『日本語条件文の諸相』くろしお出版　三―三十二頁
庵功雄（二〇一七）『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
上田博人編（二〇一一）『スペイン語文法ハンドブック』研究社
蓮沼昭子・有田節子・前田直子（二〇〇一）『日本語セルフマスターシリーズ　条件表現』くろしお出版
福嶌教隆（二〇一九）『スペイン語のムードとモダリティ：日本語との対照研究の視点から』くろしお出版
前田直子（二〇〇九）『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述―』くろしお出版
前田直子（二〇二〇）「条件表現4形式使い分けルールの簡略

化：日本語教育のための日本語研究をめざして」『日本語文法』二十巻二号
益岡隆志・田窪行則（一九九三）『改訂版基礎日本語文法』くろしお出版
Montolio, Estrella（1999）Las construcciones condicionales. Ignacio Bosque Muñoz y Violeta Demonte Barreto（eds.）*Gramática Descriptiva de la Lengua Española.* Espasa Calpe, S. A., Madrid.（日本語版抄訳　和佐敦子）

使用コーパス

Corpus de aprendices de español（CAES）（Instituto Cervantes）（https://galvan.usc.es/caes/）
El Corpus del Español del Siglo XXI（CORPES XXI）（Real Academia Española）（https://apps2.rae.es/CORPES/view/inicioExterno.view）

使用辞書

Diccionario de la lengua española（Real Academia Española）（https://dle.rae.es/si?m=form）

（ありた・せつこ　本学教授）